論文

生活意識と被服着用行動の因果関係

隈元 美貴子 [1)]・柳田 元継 [2)]

キーワード：被服着用行動，生活意識，因子分析，共分散構造分析

要旨：本研究では、対象者を大学生とし、生活意識と被服着用行動との間に因果関係があるかどうかを明らかにすることを目的とし、アンケート調査を行った。生活意識を測定する 64 項目への反応を因子分析したところ、「充実感」、「健康意識」、「身だしなみ」、「不信感」、「向上心」、「家族」の因子を抽出した。また、被服着用行動を測定する 38 項目への反応を因子分析したところ、「自己変容・自己顕示」、「ファッション性」、「低価格志向」、「同調性」の因子を抽出した。ここで、生活意識と被服着用行動の因果関係を明らかにするため、共分散構造分析を行った。以上の結果から、S 大学学生において、身だしなみに気を遣うという生活意識をもつ学生ほど、着用行動の際、自己の変容を意識し、ファッション性を強く意識することが明らかになった。また、内向的で不信感を抱いている学生ほど、低価格志向であることが明らかとなった。

緒言

被服は生活用具の一つとして、人間生活の中の機能的な実用目的に規定されて制作されたものでありながら、視覚性の意志の自由を発揮し得る余地がある。その結果、過去にさまざまな形がうまれ、現在も新しい意志に支えられて新しい被服が製作されている。また「被服」は人に着用されて「服装」として完了する。生活のそれぞれの局面の中で、人と被服の相互のかかわり合い、つまり装いの在り様において被服は解釈されるべきであり、制作した人および着装する人間を無視して、単に色と形の造形的性格の変容のみをとらえるべきでないと思われる [1)]。

こうした背景から、被服に関する人間の選択や着用行動を研究することへの関心が高まりつつある。特に、個人の水準では、感覚や知覚、感情や気分、パーソナリティや自己概念、欲求や動機、態度、価値観、ライフスタイルといった概念を用いて研究が行われている。

欲求と被服行動の関係に関しては、マズローの欲求分類により説明することができる。マズローは、欲求は階層構造をなしており、第一段階の「生理的欲求」、第二段階の「安全の欲求」、第三段階の「所属と親和の欲求」、第四段階の「尊敬と承認の欲求」、第五段階の「自己実現の欲求」に分類できるとしている。自己実現の欲求とは、自分自身を成長させ、

１）山陽学園大学総合人間学部生活心理学科
２）有限会社 NTC 技建　人間・環境開発部

豊かにしていく欲求であり、被服行動でいうならば、例えば、デザインをする事から、それを着用するまでの一連の行為がそれに当たる。また、クリークモア（A.M.Creekmore）は、マズローの分類に加え、第六段階に「知識への欲求」、第七段階に「審美的動機」、第八段階に「アクションに対する欲求」を加えて着装動機の研究を行っており、被服行動における自己実現の欲求は、クリークモアが言うところの第六段階から第八段階にあたると考えられる[2)]。

被服行動を説明するための概念のひとつの「態度」は、オルポートにより定義されている。「態度とは個人がかかわりを持つあらゆる対象や状況への個人の反応に、指示的あるいは力動的な影響を及ぼす経験を通じて体制化された精神的、神経的な準備状態である。」と定義されている[3)]。

この態度と被服行動に関する研究において、購買態度と被服行動について報告されている。被服に対する購買態度は、一般の商品全体に対する購買態度によっても規定される。さらには、保守的・革新的といった生活態度や、目的合理的、価値合理的といった価値態度によっても規定される。佐々木らは、購買態度の基本的次元を「合理性」と「情緒性」という二次元で測定する尺度を作成し、購買態度のプロフィールに基づく商品の分類を行っている[4)]。被服に対する購買態度も大きくはこのような二つの次元でとらえる事ができよう。また、中川らは erc scale 尺度を用いて購買態度を測定し、被服の購買行動との関連を見出している[5)]。

また、着装態度について、天野らは、若い勤労者を対象に、着装態度のタイプと被服行動特性の関係を検討している。その結果、ファッション情報への関心については、売り場の陳列商品を注意してみる、他人の服装をいつも注意してみるなど身近な情報への関心が高い。そして、着装態度では、着心地や肌触り、動きやすさに加えて、場所がらを重視し、他人に不快感を与えない服装、清楚な服装を心がけており、服装は信用に関わるからおろそかにできないと回答するなど、社会性、容儀性を重視している。しかし、一方で、異性に魅力的に見られるような服装がしたい、周りに縛られず自分の好きな服装をしたいなどおしゃれへの関心が強いことが報告されている。そして、着装態度を他者同調流行追随型、おしゃれ軽視流行否定型、個性重視流行積極的型、他者同調流行消極的型の４つのタイプに分け、流行行動や購買行動、被服費などにおいてタイプ別に差異がみられることを明らかにしている[6)]。

隈元らは、被服行動とライフスタイルの関連性について研究を行い、被服行動を測定する 20 項目への反応を因子分析し、４因子を抽出した。それぞれの因子を、「流行性」「経済性」「機能性」「規範性」と命名した。これらをもとに、被服行動によるクラスター分析を行い、「流行性」に低い値を示す「ファッション無関心型」、「流行性」に高い値を示す「ファッション重視型」、「規範性」に高い値を示す「TPO 重視型」に類型化した。また、ライフスタイルに対する各質問の回答を、一元分散分析後、多重比較を行った。その結果、被服行動による類型ごとにライフスタイルに差異が認められた[7)]。しかし、これらの論文では、被服行動と、ライフスタイルもしくは、生活意識との因果関係については言及していない。

隈元は、2000 年に、生活信条と生活意識、衣生活意識、着用行動、購買行動に対するアンケートを行い、それぞれにおいて因子分析を行い、抽出した因子間に因果関係が認めら

れるかどうかパス解析を行った[8)]。その結果から、生活意識において協調性のある考え方を示す人は、着用行動では同調性を示すことを示唆した。このことは、着用行動が生活意識に起因することを示している。また、孫らは 2016 年に若者の価値観が被服行動に影響を及ぼすことを報告し、構造方程式モデリングによる検討を行っている[9)]。しかし、価値観と被服行動との間の因果関係までは言及していない。

そこで、本研究では生活意識と着用行動の間に因果関係があるかどうか明らかにすることを目的とした。まず、研究の端緒として、隈元らのアンケートを使用し、予備調査を行ったところ、因果関係が認められなかった。その理由として、質問項目が現在の社会情勢や環境にそぐわないものが含まれていた可能性があったので、アンケートの再作成を行うこととした。

対象および方法

S 大学の学生を対象として KJ 法による質問紙調査を行った。実施時期は 2016 年 11 月、対象人数は 213 名、回収数は 213 名で、回収率は 100.0%であった。回収した質問紙を精査した結果、有効回答数は 146 名で、有効回答率は 68.5%であった。調査項目は、①基本属性、②生活意識に関する 64 項目、③着用行動に関する 38 項目から構成されている。統計分析は、単純集計、因子分析は SPSS16.0J を用い、共分散構造分析を AMOS ver22 を用いて行った。

結果および考察

（1）基本属性の単純集計

被服着用行動と生活意識との関係について明らかにするために質問紙調査を行い、単純集計を行った。まず、対象者の所属学科の割合を図 1 に示す。その結果、K 学科が 56.8%（83 名）、S 学科が 43.2%（63 名）であった。図 2 に対象者の学年を示す。学年は、1 年が 52.1%（76 名）、2 年が 33.6%（49 名）、3 年が 8.2%（12 名）、4 年が 6.2%（9 名）で

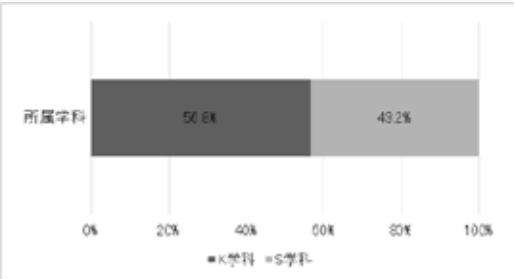

図 1　対象者の所属学科

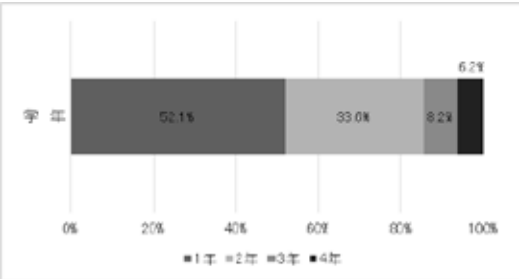

図 2　対象者の学年

あった。図 3 に対象者の年齢を示す。年齢は、18 歳が 14.4%（21 名）、19 歳が 42.5%（62 名）、20 歳が 27.4%（40 名）、21 歳が 5.5%（8 名）、22 歳が 7.5%（11 名）23 歳以上が 2.7%（4 名）であった。図 4 に対象者の性別を示す。性別は、男性が 15.8%（23 名）、女性が 84.2%（123 名）であり、大半が女性であった。図 5 に対象者の住居形態を示す。住居形態は、自宅が 65.8%（96 名）、アパートが 26.0%（38 名）、寮が 8.2%（12 名）であ

った。図６に対象者の出身地を示す。出身地は、岡山県が 60.3%（88 名）、広島県が 5.5%（8 名）、沖縄県が 5.5%（8 名）、香川県が 4.8%（7 名）、その他が 24.0%（35 名）であった。

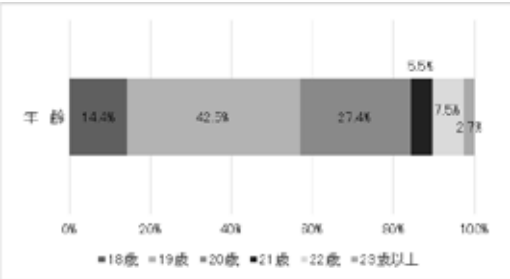

図３　対象者の年齢

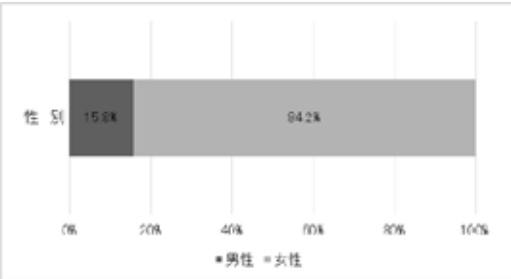

図４　対象者の性別

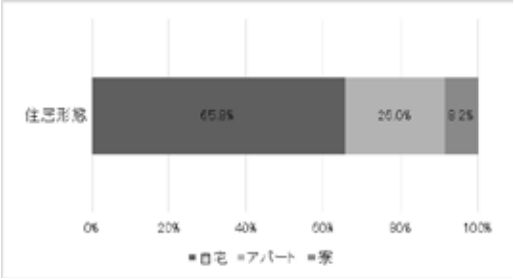

図５　対象者の住居形態

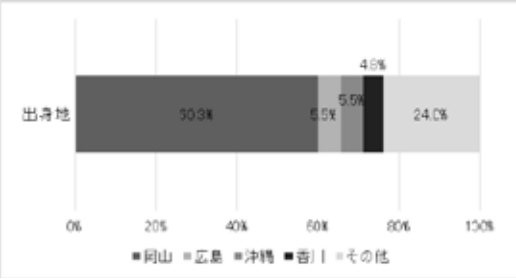

図６　対象者の出身地

図７に対象者の１ヶ月の小遣いを示す。１ヶ月の小遣いは、3 千円未満が 6.2%（9 名）、3 千円以上 5 千円未満が 4.1%（6 名）、5 千円以上 1 万円未満が 21.2%（31 名）、1 万円以上 2 万円未満が 19.2%（28 名）、2 万円以上 3 万円未満が 9.6%（14 名）、3 万以上 4 万未満が 10.3%（15 名）、4 万以上 5 万未満が 8.2%（12 名）、5 万以上 7 万未満が 13.0%（19 名）、7 万以上 10 万未満が 5.5%（8 名）、10 万以上が 2.7%（4 名）であった。図８に対象者の１ヶ月の被服費を示す。１ヶ月の被服費は、3 千円未満が 24.0%（35 名）、3 千円以上 5 千円未満が 19.9%（29 名）、5 千円以上 1 万未満が 37.0%（54 名）、1 万円以上 2 万円未満が 15.1%（22 名）、2 万円以上 3 万円未満が 3.4%（5 名）、3 万円以上～7 万円未満が 0%（0 名）、7 万以上 10 万未満が 0.7%（1 名）、10 万円以上が 0%（0 名）であった。

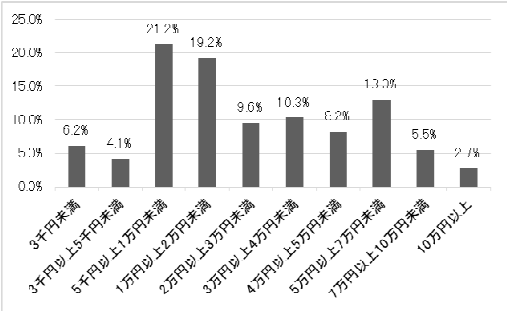

図７　対象者の１ヶ月の小遣い

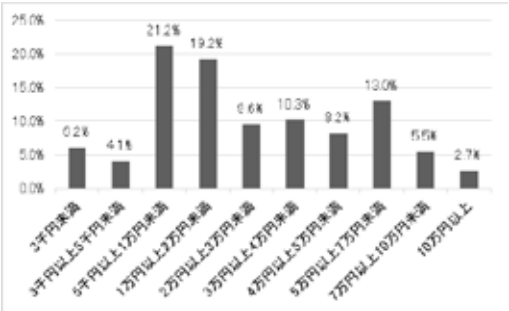

図８　対象者の１ヶ月の被服費

図９に被服に関する情報を得る手段を示す。雑誌からが 47.3%（69 名）、母親・子供からが 8.9%（13 名）、広告を見てが 16.4%（24 名）、ディスプレイを見てが 19.2%（28 名）、兄弟・姉妹からが 5.5%（8 名）、テレビを見てが 41.8%（61 名）、友達からが 27.4%（40 名）、店員からが 13.7%（20 名）、インターネットを使ってが 50.7%（74 名）、通信販売のカタログを見てが 13.7%（20 名）、街頭で他者を見てが 18.5%（27 名）、同僚からが（アルバイト先を含む）2.7%（4 名）、その他は 0%（0 名）であった。

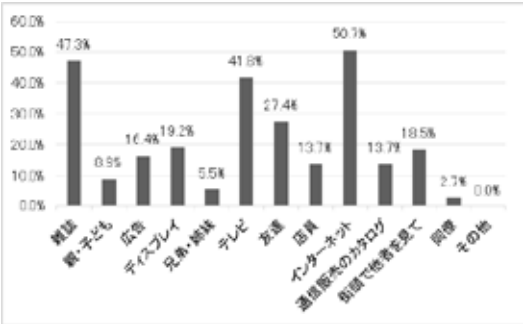

図９　被服に関する情報を得る手段

（２）生活意識の因子分析

生活意識を測定する 64 項目への反応を因子分析（主因子・プロマックス回転）し、過去の文献やスクリープロットを参考に６因子を抽出した。因子分析の結果は表１に示す。第１因子には、「熱中したい」、「夢中になりたい」、「生活の中で生きがいや充実感を感じたい」、「何かに打ち込みたい」の項目の因子負荷量が高いことから、「充実感」の因子と解釈した。第２因子には、「生活習慣病にならないように食事に気をつけている」、「健康意識は常に高い方である」、「美容のために食事は意識している」の項目の因子負荷量が高いことから「健康意識」の因子と解釈した。第３因子には、「大学に行く時、ファッションや身だしなみに気を遣う」、「スタイルを気にする」、「髪を染めると気分転換になる」、「ショッピングでストレスを発散することができる」の項目の因子負荷量が高いことから「身だしなみ」の因子と解釈した。第４因子には、「人生、お金がすべてである」、「結局、自分しか信じられないと思う」、「人付き合いは面倒くさい」の項目の因子負荷量が高いことから「不信感」の因子と解釈した。第５因子には、「上を目指したい」、「自分は好奇心が強いと思う」、「社会に貢献したいとは思わない（－）」の項目の因子負荷量が高いことから「向上心」の因子と解釈した。第６因子には、「家族が一番大切である」、「家族と仲がいい」、「家族のことが気になる方である」の項目の因子負荷量が高いことから「家族」の因子と解釈した。

（３）被服着用行動の因子分析

着用行動を測定する 38 項目への反応を因子分析（主因子・プロマックス回転）し、過去の文献やスクリープロットを参考に４因子を抽出した。因子分析の結果は表２に示す。第１因子には、「違う自分を演出する服を着る」、「目立つ服を選ぶ」、「物事がうまくいかないときは鮮やかな服を着る」、「他人と異なる服を着る」、「デザイナーを気にする」、「不謹慎だと分かっていても着たい服を着る」の項目の因子負荷量が高いことから「自己変容・自

表１　生活意識因子分析

FACTOR 質問項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
熱中したい	0.894	-0.014	0.047	0.025	0.053	-0.053
夢中になりたい	0.858	0.020	0.051	0.046	0.098	-0.065
生活の中で生きがいや充実感を感じたい	0.816	0.037	0.000	-0.114	-0.032	-0.120
何かに打ち込みたい	0.767	-0.064	0.080	-0.007	0.047	0.172
生活習慣病にならないように食事に気をつけている	0.055	0.944	0.120	0.103	-0.106	-0.083
健康意識は常に高い方である	-0.037	0.747	0.024	0.039	0.046	0.022
美容のために食事は意識している	0.020	0.690	0.219	-0.049	0.103	-0.070
大学に行く時、ファッションや身だしなみに気を遣う	-0.042	0.146	0.796	-0.115	-0.100	0.038
スタイルを気にする	0.231	0.167	0.697	-0.001	-0.142	-0.055
髪を染めると気分転換になる	-0.039	0.070	0.540	0.077	-0.184	0.198
ショッピングでストレスを発散することができる	-0.096	0.002	0.534	0.054	0.148	0.081
人生、お金がすべてである	-0.183	0.077	0.123	0.762	0.003	0.067
結局、自分しか信じられないと思う	0.038	-0.009	-0.044	0.761	0.104	0.107
人付き合いは面倒くさい	0.163	0.112	-0.013	0.571	-0.262	0.075
上を目指したい	0.254	0.036	-0.105	0.055	0.967	0.014
自分は好奇心が強いと思う	-0.027	0.010	-0.146	0.047	0.818	0.137
社会に貢献したいとは思わない	0.097	0.092	-0.103	0.160	-0.534	0.006
家族が一番大切である	-0.143	-0.037	-0.084	0.061	0.067	0.921
家族と仲がいい	0.082	-0.189	0.063	-0.002	0.014	0.809
家族のことが気になる方である	0.071	0.171	0.288	0.199	0.147	0.557
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
Ⅰ	－	0.053	0.256	-0.070	0.351	0.463
Ⅱ		－	-0.022	-0.073	0.299	0.257
Ⅲ			－	0.013	0.336	0.095
Ⅳ				－	-0.055	-0.119
Ⅴ					－	0.227
Ⅵ						－

己顕示」の因子と解釈した。第２因子には、「自分に似合うファッションを着る」、「デザインを重視する」、「トータルファッションを考えて着る」、「見た目（質感）を重視する」、「好きな色や形で決める」、「天候を考えて服を選ぶ」の項目の因子負荷量が高いことから「ファッション性」因子と解釈した。第３因子には、「安ければ安いほどいい」、「衣服は百貨店より低価格な店のものが多い」、「気に入った服があっても値段が高いと着ない」の項目の因子負荷量が高いことから「低価格志向」の因子と解釈した。第４因子には、「周囲の人に合わせた服を着る」、「周囲の人のファッションを参考にする」の項目の因子負荷量が高い

ことから「同調性」の因子と解釈した。

表２　着用行動の因子分析

FACTOR 質問項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
違う自分を演出する服を着る	0.844	0.021	0.161	-0.040
目立つ服を着る	0.799	0.134	-0.125	-0.110
物事がうまくいかないときは鮮やかな服を着る	0.756	-0.186	0.081	0.176
他人と異なる服を選ぶ	0.626	0.058	0.025	-0.098
デザイナーを気にする	0.614	-0.043	0.013	-0.040
不謹慎だと分かっていても着たい服を着る	0.506	-0.234	0.208	-0.158
自分に似合うファッションを着る	0.021	0.702	0.225	-0.028
デザインを重視する	-0.054	0.701	0.067	-0.157
トータルファッションを考えて着る	0.132	0.654	0.103	0.062
見た目（質感）を重視する	-0.032	0.634	0.074	-0.059
好きな色や形で決める	0.003	0.623	0.245	0.040
天候を考えて服を選ぶ	-0.194	0.557	-0.142	0.032
安ければ安いほどいい	0.178	0.062	0.641	-0.086
衣服は百貨店より低価格な店のものが多い	-0.026	0.195	0.631	-0.001
気に入った服があっても値段が高いと着ない	0.067	0.023	0.627	0.139
周囲の人に合わせた服を着る	-0.093	-0.165	0.030	0.754
周囲の人のファッションを参考にする	-0.065	0.134	0.140	0.545
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	－	0.279	-0.022	0.327
Ⅱ		－	-0.121	0.420
Ⅲ			－	0.146
Ⅳ				－

（４）「着用行動」と「生活意識」各因子の構造方程式モデリング

S大学学生の着用行動と生活意識の因果関係を明らかにするため、共分散構造分析を行った（図１０）。着用行動（wearing-behavior）の第１因子「W-F1 自己変容・自己顕示」の4項目と第２因子「W-F2ファッション性」の3項目をそれぞれの観測変数に、生活意識（life consciousness）の第３因子「L-F3 身だしなみ」の2項目を観測変数にした構造方程式のモデルを検討した。まず、因果モデル全体が正しいかどうか評価するために、帰無仮説「構成されたモデルは正しい」という設定の下、χ^2検定を行ったところ、χ^2=47.350（df=34）、p=0.064となり、モデルは棄却されなかった。次に、適合度指標をみると、GFI=0.941、AGFI=0.904、RMSEA=0.052を示したので、モデルの説明力、データへの当てはまりから適合度が非常に高いと言える。また、モデルの部分評価として、パス係数（標

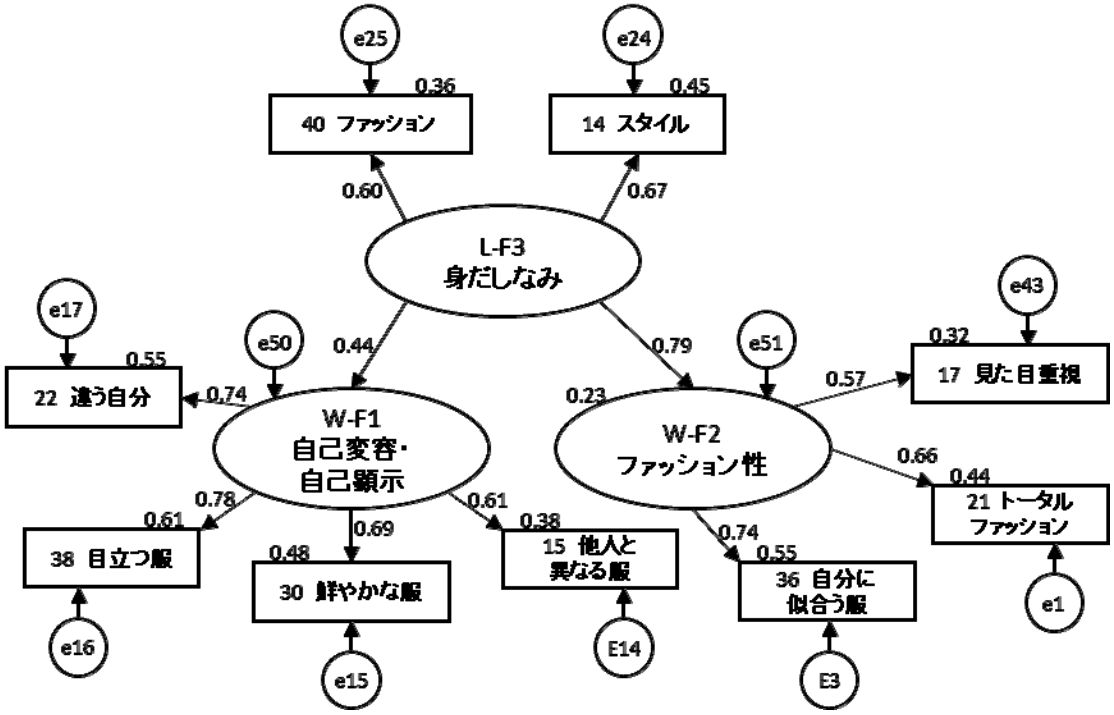

図１０　生活意識と被服着用行動の共分散構造分析

準化推定値）を見てみると、すべて0.1%水準で有意であり十分な値を示した。

潜在変数（楕円形で表す）間のパス係数を見ると、「L-F3 身だしなみ」→「W-F1 自己変容・自己顕示」（矢印は因果関係を示し、原因と結果を表す）のパス係数は0.44であり正の因果関係を示した。また、「L-F3 身だしなみ」→「W-F2ファッション性」のパス係数は0.79であり正の因果関係を示した。「L-F3 身だしなみ」は「40 大学に行く時、ファッションや身だしなみに気を遣う（0.60）」と「14 スタイルを気にする（0.67）」とで構成され、「W-F1 自己変容・自己顕示」は「22 違う自分を演出する服を着る（0.74）」と「38 目立つ服を着る（0.78）」、「30 物事がうまくいかないときは鮮やかな服を着る（0.69）」、「15 他人と異なる服を選ぶ（0.61）」とで構成されるまた、「W-F2ファッション性」は「36 自分に似合うファッションを着る（0.74）」と「21 トータルファッションを考えて着る（0.66）」、「17 見た目（質感）を重視する（0.57）」とで構成される。

以上の結果から、S大学学生において、大学に行く時、ファッションや身だしなみに気を遣い、スタイルを気にするといった生活意識をもつ学生ほど、着用行動の際、違う自分を演出する服や目立つ服、物事がうまくいかないときは鮮やかな服、他人と異なる服を選び、自己の変容を意識し、さらに、自分に似合うファッションを着用し、トータルファッションを考え、見た目を重視するといったファッション性を強く意識することが明らかになった。

次に、S大学学生の着用行動と生活意識の因果関係を明らかにするため、共分散構造分析を行った（図１１）。着用行動（wearing-behavior）の第３因子「W-F3低価格志向」の3項目を観測変数に、生活意識（life consciousness）の第４因子「L-F4不信感」の2項目を観測変数にした構造方程式のモデルを検討した。まず、因果モデル全体が正しいかどうか

評価するために、帰無仮説「構成されたモデルは正しい」という設定の下、χ^2検定を行ったところ、χ^2=2.911（df=4）、p=0.573となり、モデルは棄却されなかった。次に、適合度指標をみると、GFI=0.992、AGFI=0.970、RMSEA=0.000を示したので、モデルの説明力、データへの当てはまりから適合度が非常に高いと言える。また、モデルの部分評価として、パス係数（標準化推定値）を見てみると、すべて0.1%水準で有意であり十分な値を示した。

潜在変数（楕円形で表す）間のパス係数を見ると、「L-F4不信感」→「W-F3低価格志向」（矢印は因果関係を示し、原因と結果を表す）のパス係数は0.45であり正の因果関係を示した。「L-F4不信感」は「1　結局、自分しか信じられないと思う（0.65）」と「7 人付き合いは面倒くさい（0.69）」とで構成され、「W-F3低価格志向」は「8 安ければ安いほどいい（0.64）」と「24 衣服は百貨店より低価格な店のものが多い（0.48）」、「16気に入った服があっても値段が高いと着ない（0.59）」とで構成される。以上の結果から、S大学学生において、生活意識の中で、結局自分しか信じられないと思う、人付き合いは面倒くさいといった、人に対して内向的な、また不信感を抱いている学生ほど、着用行動の際、低価格な店で購入した服を選ぶ場合が多く、高い服を選ばないなど、低価格志向であることが明らかとなった。

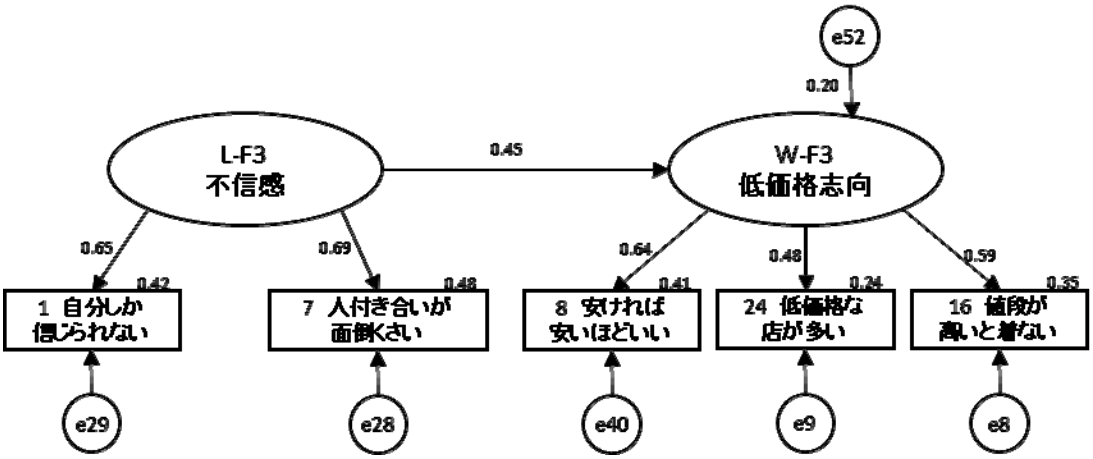

図１１　生活意識と被服着用行動の共分散構造分析

４．総合考察

これまで、生活意識と被服行動間に関係があることの報告があったが、生活意識と着用行動との因果関係を調べた例はほとんどなかった。そこで、それぞれのアンケート調査を行い、分析した結果、生活意識の中でファッションやスタイル等、身だしなみに気を遣う人ほど、違う自分を演出する、目立つ服を着るなど自己変容や自己顕示といった着用行動をすることがわかった。また、自分に似合うファッションを着る、トータルファッションを考えて着るなどファッション性に富む着用行動することも分かった。身だしなみに気を遣う人ほどファッショナブルな着用行動をするのは、なるほど、納得できる結果であるが、因果関係を明らかにしたのは本研究が初めてである。

また、着用行動の因子分析の結果はこれまで多く示されているが、上位の因子としてはファッション性や機能性が抽出されていた。しかし、本研究では、自己変容の因子が上位に抽出されている。このことは、着用行動を規定する基準が、見た目や流行だけにとらわ

れたものではなく、より自己の内面を表現したいなど、外観性から内面性へ、また物質的から精神性へと変化してきている可能性が示唆される。他方で、不信感が強いほど、低価格志向であることが示された。不信感が強い場合、人とのかかわりを避ける傾向があるため、これまでの研究で明らかになっているようにnon-verbal communication のツールである被服にお金をかけることをしないのかもしれない。「被服は自己を映す鏡である」などと、被服が人の心理状況や内面を表すことが言われてきたが、本研究によって、生活意識と着用行動の因果関係が示されたことから、その一部が実証されたと考えられる。今後、アンケートに改変を加えることにより、より多様な心理状態と被服行動の因果関係が明らかにされることが期待される。

引用文献

1) 奥山春彦, 水梨サワ子. 服装史－西洋・日本編－. 東京, 1976, iii.
2) 小林茂雄.“被服の選択動機と欲求.” 被服心理学. 被服心理学研究分科会編 日本繊維機械学会, 1988, 19-28.
3) 中川早苗.“態度と被服行動.” 被服心理学. 被服心理学研究分科会編 日本繊維機械学会, 1988, 52-71.
4) 佐々木土師二. 購買態度の情緒性と合理性に関する新尺度--erc scaleの提案と構造分析. 関西大学社会学部紀要, 1984, 15(2), 25-44.
5) 中川早苗ほか. ライフスタイル分析の実際. 日本繊維機械学会被服心理学研究分科会テキスト. 1987, 55.
6) 天野好野, 白井佐代子, 中川早苗. 勤労者のライフスタイルと被服行動に関する調査研究(第1報)：勤労者のライフスタイルと着装行動との関連について：愛知県内の若者における調査から. 家政学研究, 1991, 37(2), 86.
7) 隈元美貴子. 女子大生の生活意識と被服行動について. 山陽学園短期大学紀要, 2000, 47-48.
8) 隈元美貴子, 柳田元継. 被服行動とライフスタイルの関連性. 山陽論叢, 2014, 79-85.
9) 孫 珠熙, 馬場弘朗. 若者の価値観が被服行動に及ぼす影響：構造方程式モデリングによる検討. 富山大学人間発達科学部紀要, 2016. 11(1), 157-174.